

生徒会新聞

鹿児島県立志布志高等学校
令和2年12月24日発行
★第3号★

★生徒会長挨拶★

今年度の役員改選で、三年生を中心とした生徒会から一、二年生主体の生徒会に代わり、9月の文化祭から本格的に仕事をしています。今回、生徒会長に就任した武石大翔さんにこれからの抱負を語ってもらいました。(取材 川畑 蒼志)

Q: 今後の意気込み・今後の目標は？

A やはり公約である遠足を復活させることです。

きつと皆さんを楽しい遠足へと連れていきます！

Q 目指したい学校とは？

A 私は生徒同士で高め合うことの出来る学校を目指します。

私たちがそれぞれライバルを見つけ、勉強・部活動などで競い合い高め合う、そんな学校を作っていきたいと考えています。

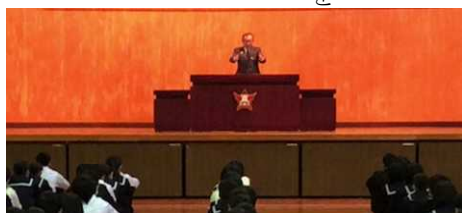
Q みんなへ一言お願いします！

A 私は、生徒会の経験が浅い未熟者ですが、生徒の皆さんのためには精一杯努力します。よろしくお願いします。



★校長先生から新生徒会・志高生へ★

生徒会を中心に挨拶運動を定期的にもっと多く、きちんと取り組んでほしいと思います。また部活でも普段の授業でも、メリハリと持つことを意識して取り組んでほしいと思います。全校朝会でいろいろな話をしますが、受け取り方は人それぞれだと思います。しかし最終的に、自分はどうありたいと決める一つのきっかけになればと思っています。コロナ禍など時代は辛いときもあるけど、たくましく、心を強く持ち、めげず今のこの時代に取り切っしてほしいです。



★前生徒会長より★

前生徒会長の竹吉彩乃さんに、一年間の活動を振り返ってみて思うことを尋ねてみました。(取材 川畑 蒼志)

Q 昨年の生徒会で大変だったことは？

A 生徒会新聞の発行と志布志高校をより多くの方に詳しく知ってもらえるように作ったパンフレット作成です。自分たちで一から考えて発行までやり遂げるのは、とても大変でした。しかし、全てやり遂げたあとの達成感は、とても大きくて、やりがいを感じるこゝとが出来ました。

Q 生徒会でやってよかったことは？

A 昨年度の卒業式で三年生の先輩方に感謝の気持ち伝えるために行った 横断幕作成です。急であつたにもかかわらず、生徒・先生方から百通以上ものメッセージを頂戴することができました。先輩方もすごく喜んでくださったので本当に嬉しかったです。また、こういった経験を通して、改めて志布志高校の温かさに触れることができたので、やってよかったと思いました。

Q 新生徒会に期待したいことは？

A 生徒会を筆頭に、生徒の意見を聞き入れさらに志布志高校の魅力を引きだし、発展することに繋げてくれるのではないかと期待しています。大人数の生徒会であるからこそ様々な視点から物事を考えることができると思うので、より多くの方に志布志高校をアピールできるように頑張ってください。



★コロナ禍の部活動…野球部★

新型コロナウイルスの流行は私たちの高校生活にも大きな影響を及ぼしました。様々な行事が中止・延期・縮小を余儀なくされるとともに、部活動についても大会の中止が相次ぎました。今回は、コロナ禍で本校野球部がどのように過ごしていたのか、三年生の野球部員に取材しました。(取材 川畑 蒼志)

甲子園予選がないと知った時に部員の皆さんは「最後の夏がなくなる」(三年生)、「試合機会が失われる」(二年生)など、大きな戸惑いを感じたそうです。大会がなくなり、全体練習すらできない期間が続いたことでモチベーションが下がる中、大会開催の可能性を感じて、ひたすらそれぞれの課題に取り組んだといいます。二学期を前に引退した三年生の野球部員は、「部活を続けてきて、努力・情報共有・感謝の三つの重要さに気づいた」と、話してくれました。以下は副キャプテンの竹川竜樹さんの言葉です。

公立高校の野球部が、少ない練習時間で効率よく技術を取り入れながら、身体をつくるのは、とても難しいことだ。それをこなすには、自主練など選手が必要であった。小さな一歩でも歩み続けると少しずつではあるが、結果が出てくるものだ。

野球は連係プレーが多い。野球は一人で守るスポーツではないため、他のポジションの人の情報共有が必要となる。日ごろの練習を支えて下さった先生やマネージャー、そして保護者の方々のおかげで、一生懸命練習に励めた。その支えに感謝することでプレーに全力で取り組めた。三つのことは全て結果につながっており、結果を求めるスポーツであるからこそ学べたことだ。野球を通してこの三つを学ぶことができて良かったと心から思う。



志布志高校今昔★

普段、先生方はどのような思いを抱えて私たち生徒と関わっているのでしょうか。そこで、志布志高校の先輩である数学科の立山剛大先生(平成二十一年卒)に、当時の志布志高校や現在の志布志生についてどう思うかなど、様々なお話を伺いました(取材 一丸 西菊)。

☆ ☆ ☆

立山先生の在学当時は、文系二クラス、理系二クラス・英語科一クラスだったそうです。芸術科の某先生が怖かったといいます。当時は国立大学への進学も多く、文化祭は市の会館で行われていたほか、十六キロを歩く志布志湾遠行が行われていたということでした。部活動の数・人数も今より多かったそうです。受験の話が出たところで、受験勉強のコツも聞いてみました。

先生は、「わからないことをわからないままにしない。わからないことをそのままにして平気な顔をしていられる意味がわからない。」とおっしゃり、受験勉強に関わらず、「出来ないことを出来ないまま本番に臨むことはあり得ない」と私たちに伝えてくれました。そんな先生から見て、現在の志布志高は、「それでいいの?」と感じるようです。「自分の理想の人間像や生き方に近づくためには、今をどうするべきか。やらない人に合わせたり、やらない理由を探したりするのは理想から遠ざかる行為です」という先生の言葉が響きました。



「志高便り」とは別の視点で今回は記事を書いてみました。まだまだコロナの予断を許さない日々が続きますが、お互いに気をつけていきましょう。(生徒会広報担当)

